

# ECONOMY TOPICS

## 経済トピックス

2019.12.5

No.460



### 2019年冬のボーナス調査

株式会社青森銀行と一般財団法人青森地域社会研究所では、共同で県内給与所得者を対象としたボーナス動向や暮らし向きに関するアンケート調査を継続実施しております。

このたび、上記調査に基づく、2019年冬のボーナス動向や生活実感による最近の暮らし向き調査結果がまとまりましたのでお知らせいたします。

【調査要領】		回答者内訳				
○対象者	県内給与所得者	(単位:人)				
○調査時期	2019年10月中旬～11月上旬	属性	男性	女性	合計	構成比
○配布枚数	1,000枚	20代	74	132	206	21.0%
○回収枚数	979枚 (回収率 97.9%)	30代	92	116	208	21.2%
		40代	125	178	303	30.9%
		50代	98	115	213	21.8%
		60代以上	23	26	49	5.0%
		民間企業	268	453	721	73.6%
		公務員	144	114	258	26.4%
		合計	412	567	979	100.0%

注: 20代は20歳未満を含む。

#### 1. ボーナス支給の有無 給与所得者の約9割がボーナス有を予想

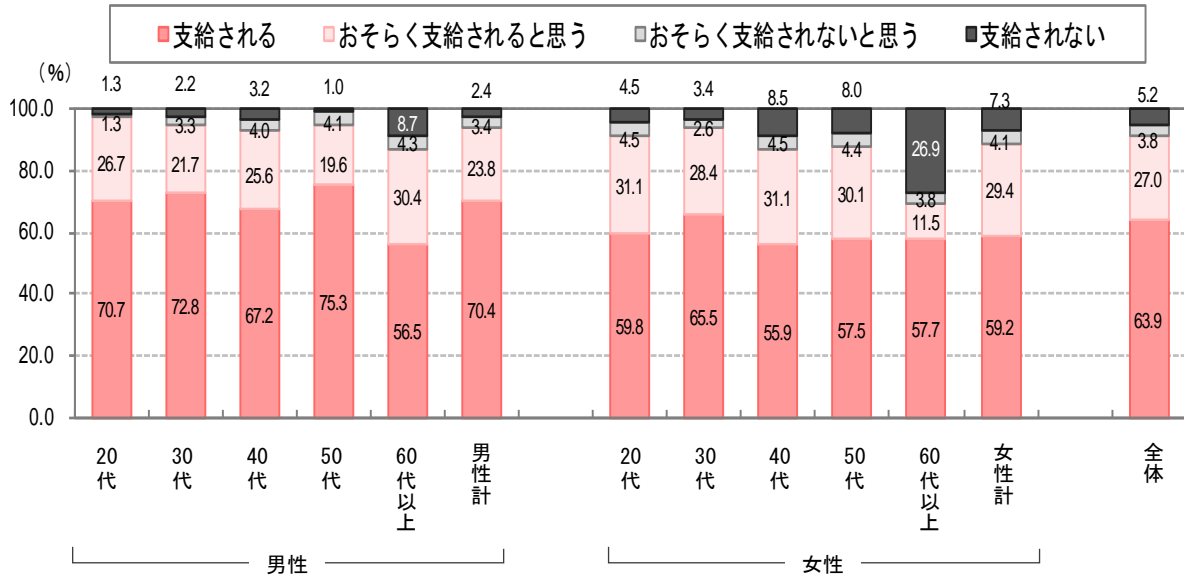
今冬のボーナス支給の有無については、「支給される」が63.9%、「おそらく支給される」が27.0%となり、両回答を合計した約9割がボーナスの支給を見込んでいる。

男女別では、男性(94.2%)が女性(88.6%)を5.6ポイント上回っている。

更に詳細に、男女・年代別にみると、男性は、50代以下では全ての年代で9割以上がボーナス支

給を見込んでいるが、60代以上では86.9%とやや低めの見込みとなっている。また、女性は、20代・30代の9割以上が支給を見込んでいる一方で、40代・50代では8割台、60代以上では6割台と年代を追うごとにボーナス支給を見込む割合が低下している。このような背景には、正規・非正規雇用といった雇用形態が影響している可能性が高い。(以上、図表1参照)

(図表 1) ボーナス受給見込



## 2. ボーナス見込額 □昨年比ほぼ横ばいの平均 37 万 8 千円

今冬のボーナス見込額は平均で 37 万 8 千円となり、昨年冬の受給実績(平均 37 万 9 千円)を 1 千円下回る結果となったものの、ほぼ横ばいの動きといえる。

男女別では、男性が 46 万 4 千円、女性が 31 万 1 千円となり、平均見込額の差は 15 万 3 千円となった。

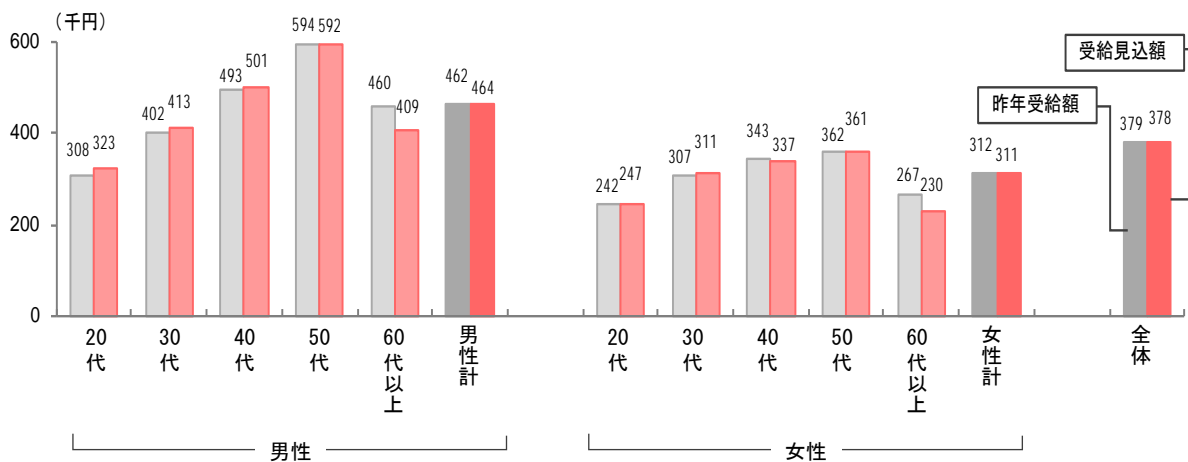
更に詳細に、男女・年代別にみると、全年代と

も男性が女性を上回っているが、最も開きが大きかったのは 50 代で、男性(59 万 2 千円)と女性(36 万 1 千円)の差は 23 万 1 千円となっている。

昨年冬の受給実績額との増減額をみると、60 代以上男性(△5 万 1 千円)、60 代以上女性(△3 万 7 千円)で落ち込んでいる一方、20 代男性(+1 万 5 千円)で増加幅が最も大きくなっている。

(以上、図表 2 参照)

(図表 2) ボーナスの受給見込額 (男女別・年代別)



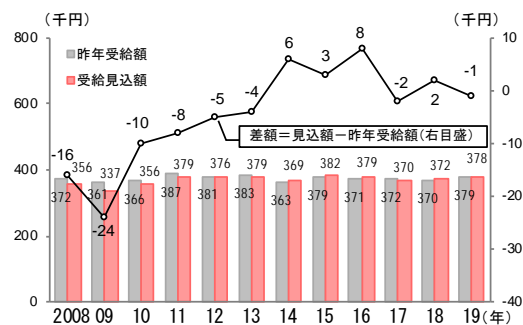
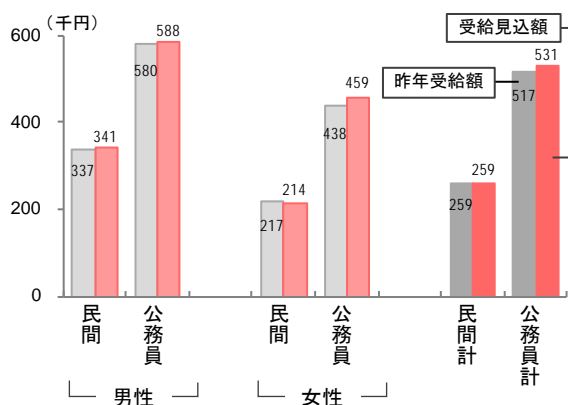
民間・公務員別では、民間の25万9千円に対し、公務員は53万1千円となった。

これを男女別にみると、民間男性の34万1千円に対し、公務員男性は58万8千円となり、平均見込額の開きは24万7千円となった。また、民間女性の21万4千円に対し、公務員女性は45万9千円となり、平均見込額の開きは24万5千円となった。(以上、図表3参照)

冬のボーナス受給見込額について2008年以降の推移をみると、13年までは前年実績を下回る動きが続いていたが、その後14年から16年は前年実績を上回り、その後はほぼ横ばい圏内での動きが続いている。

昨年までの横ばい圏内での動きは本年のボーナスの受給状況にも表れている。(以上、図表4参照)

(図表3) ボーナス受給見込額(民間・公務員別) (図表4) 冬のボーナス受給見込額の推移



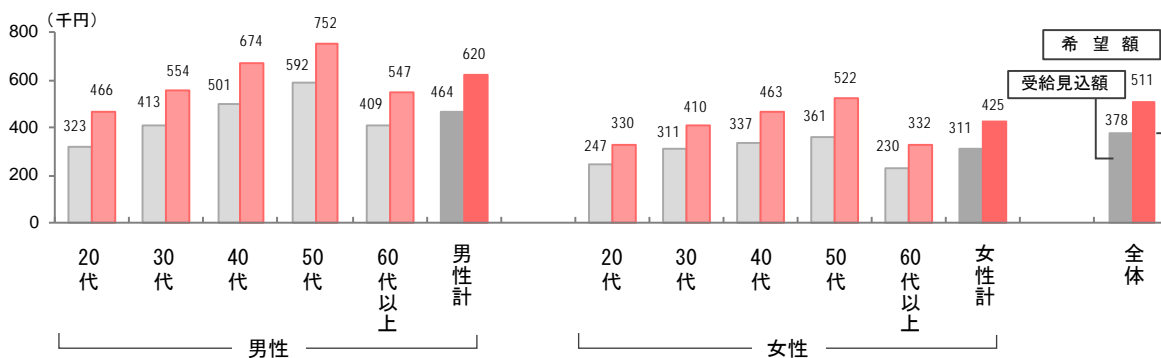
### 3. ボーナスの希望額 □希望額は51万1千円

ボーナス希望額は、51万1千円となり、見込額との差は13万3千円となった。

男女別では、男性の62万円に対し、女性は42万5千円となり、男性が女性を19万5千円上回った。

更に詳細に男女・年代別では最も高いのは50代男性で75万2千円、次いで40代男性が67万4千円などの順となった。また、希望額と受給見込額との差を年代別にみると、40代男性が17万3千円で最も大きかった。(以上、図表5参照)

(図表5) 冬のボーナス受給見込額の推移



#### 4. 最近の暮らし向き調査

##### □「現在の暮らし向き指数」 前回調査比 1.7ポイント低下

最近の暮らし向きが「良くなった」との回答割合は前回調査の2019年に比べ0.3ポイント上昇し6.1%、「悪くなった」は3.7ポイント上昇し16.3%となった。

この結果、「現在の暮らし向き指数」は同1.7ポイント低下の44.9となった。

「現在の暮らし向き指数」を男女別にみると、

男性の45.0ポイントに対し女性は44.8ポイントとほぼ同水準であった。

更に詳細に、男女・年代別にみると、20代男性が52.7と最も高く、男女とも年代の上昇とともに暮らし向きに対する見方は厳しくなり、60代以上女性が36.0ポイントと最も低くなっている。

##### □「今後の暮らし向き指数」 現状比 5.3ポイント低下

今後の暮らし向きは、現在に比べ「良くなる」が1.1ポイント低下の5.0%、一方「悪くなる」は9.4ポイント上昇の25.7%となった。

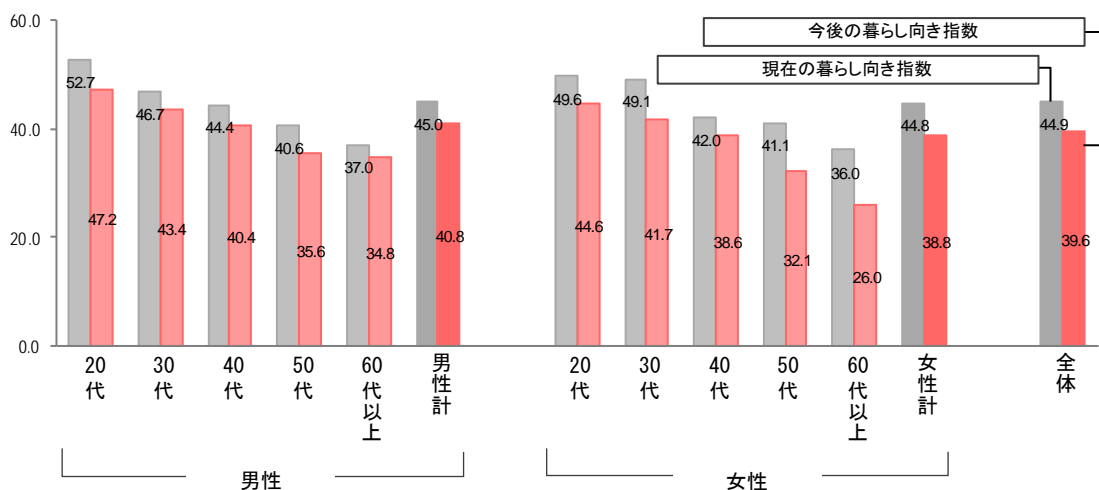
この結果、「今後の暮らし向き指数」は39.6となり、「現在の暮らし向き指数」を5.3ポイント下回り、今後の暮らし向きについて悲観的な見方をする向きが多い。

男女別では、男性の40.8に対し女性は38.8と

2ポイントの開きがあった。

男女・年代別にみると、20代男性が47.2と最も高く、男女とも年代の上昇とともに今後の暮らし向きに対する見方は厳しさを増し、60代以上男性では34.8、60代以上女性では26.0となっている。こうした背景には、老後生活の柱となる公的年金に対する不安などが関係しているものと考えられる。(以上、図表6～7参照)

(図表6) 暮らし向きについての見方(男女別・年代別)

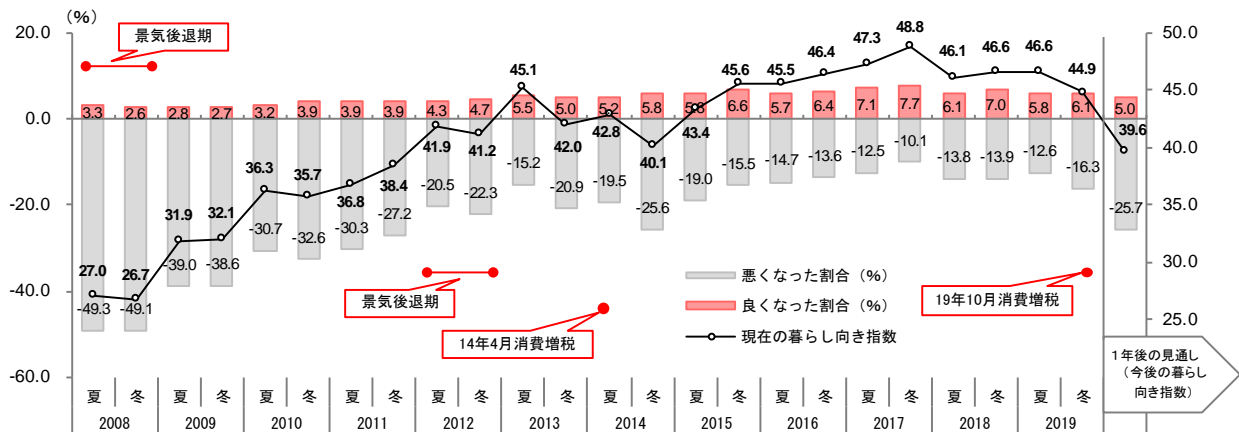


## □「今後の暮らし向き指数」の長期推移

2008年以降の長期推移をみると、リーマンショックを伴う景気後退期にあたる2008年は「現在の暮らし向き指数」は20台で低迷していたが、その後景気回復とともに12年夏まで上昇を続けた。その後、14年4月の消費増税（5%⇒8%）の影響とみられる一時的な落ち込みがあったものの、17年冬には48.8まで上昇し、18年以降は比較的高い水準を維持していた。

今回調査では「現在の暮らし向き指数」は前回と比較し1.7ポイント低下の44.9となり、「今後の暮らし向き指数」は更に39.6まで低下を予想している。背景には、本年10月の8%から10%への消費税率引き上げや米中対立などに起因する景気の先行き不透明感などが、暮らし向きの感じ方にマイナス影響を及ぼしているものと思われる。（以上、図表7参照）

（図表7） 暮らし向き指数の推移



以上

〔本件に関する照会先〕

一般財団法人 青森地域社会研究所

担当：長尾 匡道 Tel：017-777-1511